

＜書評＞Richard Florida, Cities and the Creative Class (Routledge 2005)

YAGINUMA, Hisashi / 柳沼, 寿

(出版者 / Publisher)

法政大学経営学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei journal of business / 経営志林

(巻 / Volume)

42

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

63

(終了ページ / End Page)

67

(発行年 / Year)

2005-04-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004926>

〔書 評〕

Richard Florida, *Cities and the Creative Class*
(Routledge 2005)

柳 沼 寿

1. はじめに

著者は、現在ワシントンDCにあるジョージ・メイソン大学の公共政策担当教授のポストにあって、2002年のベストセラーである *The Rise of the Creative Class* の著者としてつとに知られている。同書においては、新しい「創造的経済 (Creative Economy)」における、人口学的な多様性 (diversity) とイノベーション及び経済成長の関係が考察されている。そこでのテーマは、社会学、経済学、地理学、都市計画、等の広範な領域をカバーするもので、発刊後幅広い関心を引き起こすことになった。

本書はそれを踏まえて、イノベーションと地域の成長が、創造性や多様性とどう関わっているかをより深く実証的に分析した続編としての性格をもっている。経済成長にとって重要な3つのT (Technology, Talent, Tolerance) を涵養し、人々の潜在的な創造性を高めることが地域の繁栄をもたらす、というのが本書の中心的なメッセージである。曖昧になりがちな概念を統計データによって数値化し、地域の経済発展との関連を実証しようとする試みは大変興味深い。

2. 本書の構成

本書は全体で9つの章から構成されている。

序章の第1章では、本書の概要と、著者がこの様な問題意識を持つに至った経緯、そして前著に対する様々な領域からの批判や意見の集約、が整理されている。第2章 *Cities and The Creative Class* は、著者が新たに提示する「創造的キャピタル (Creative Capital) 理論」と、関連する様々な概念 (Technology, Talent, Tolerance, Diversity) の数値化について論じている。

続く第I部 Talent (才能) には第3章と第4章が含まれている。第3章 *Competing in the Age of Talent* では創造的経済における場所 (place) の役割を検証している。ここでは、様々な都市や地域の特性を、ハイテク度、起業家度、環境度、アメニティ度、等の形で数値データとして集約しているのが興味深い。第4章 *The Economic Geography of Talent* はTalentを中心として、Diversity・High-tech・Income 相互間の関係をバス分析によって検証している。

第II部 Tolerance (寛容度) は5章と第6章を含み、第5章 *Bohemia and Economic Geography* では、Bohemian Index (「ボヘミアン」比率) と、Talent Index (学位以上取得者比率) および Tech-pole Index (ハイテク産業比率) との相関関係を検証している。第6章 *Technology and Tolerance* は Gary Gates との共著で、幾つかの多様性指標 (ゲイ比率、ボヘミアン比率、外国生まれの居住者比率) がハイテク比率や地域の成長率と関連していることを示している。

第III部 Place (場) は最後の3つの章から成っており、第7章の *The University, Talent, and Quality of Place* では、今日の主流であるイノベーションの源泉としての大学という考えではなく、Talent を育成する場としての大学という新しい見方を提唱している。第8章の *Place-Making After 9/11* は、これまでの章と趣を異にし、航空機テロ後の Lower Manhattan 開発のあり方を創造的な人々が集まる場として考えるべきと論じている。第9章 *Open Questions* には今後の検討課題がまとめられている。

以下で各章毎にその内容を取り上げていこう。

3. 各章の概要

(1) Introduction (第1章)

序章では、前著の *The Rise of the Creative Class* 以降の議論を踏まえて、改めて地域の成長と3つのT (Technology, Talent, Tolerance) が関連していることを確認することが目的であると述べられている。その後、著者が現在までに影響を受けた人々とその考え方を振り返っているのはユニークである。子供の頃の地域共同体、父親の工場における人の大切さ、M. Piore & C. Sabel・A. Chandler・J. Jacobs・C. Freeman・R. Nelson・S. Winter・A. Saxenian、達からの影響、M. Kenneyとの仕事から受けた影響の大きさ、そして近年はK. Weickにまで広がった関心、と自らが今日に至るまで広範に渉猟した関心の広がりや研究の足跡を記しているのは研究者の自分史としても大変興味深い。

(2) Cities and The Creative Class (第2章)

本章のタイトルが自らの前著と全く同じであることから推測されるように、著者が前著で主張したことが要約されている章である。まず、これまでの地域の経済発展に関する論点を整理し、A. Marshallに代表される都市の産業集積論、近年注目を集めているR. Putnam等のSocial Capital論、及び人的資本論(Human Capital Theory)と、著者のいうCreative Capital Theory論を比較している。著者の提唱する理論は、今日のアメリカにおける労働人口の約30%を占める創造的な人々(Creative Class)が経済成長の担い手であり、しかもそのような人々はinnovative, diverse, tolerant, な場所を好む、というものである。

創造的階級(Creative Class)には、科学者・技術者、大学教員、詩人・作家、芸術家、エンターテイナー、俳優、デザイナー、建築家、その他、編集者、文化人、シンクタンクのリサーチャー、アナリスト、その他オピニオンリーダーが含まれる。ここで、Talent Indexとして著者が用いるのは学士以上取得者の割合であるが、指標としては単純化しすぎである。また、Tolerance指標は、開放性や多様性の度合いを指し、移民の割合(Melting Pot Index)、ゲイ比率(Gay Index)、ボ

ヘミアン比率(Bohemian Index)、等を採用しているが、これらも社会学的及び経済学的観点からのより深い吟味が必要であろう。

最後に、著者達のこれ等の指標を用いた研究により、技術とToleranceとTalentが強く関係していることが示唆されている。ただし、実証の詳細は後の章に回されているため、概要に留まる。

(3) Competing in the Age of Talent (第3章)

第I部Talentの最初の第3章では、様々な指標を用いて統計的な検証を行っている。Milken Instituteによるtech-pole scoreとソフトウェア労働者比率には正の相関があり、San Jose, Boston, Washington, Dallas等がwin-winの状況にある一方、Miami, Cleveland, Baltimore等が共に良好でないことが示される。但し、tech-pole scoreとCognetics社調べのEntrepreneurship度順位、ソフトウェア労働者比率とEntrepreneurship度順位、には正の相関が認めがたく、企業家精神の横溢している地域の成長が高く、そのような地域にはソフトウェア労働者が引き寄せられるという、著者の結論に賛成しがたい。TalentとEnvironmentに関しても、tech-poleとEnvironmental Quality、ソフトウェア労働者比率とEnvironmental Quality、tech-poleとAmenityのグラフには正の相関が認めにくい。ただ、Amenityとソフトウェア労働者比率には正の相関がはっきりと認められる。TalentとAmenityの関係についても、明確に正の相関が認められるのは、ゲイ比率とハイテクランキング、ゲイ比率とソフトウェア労働者比率で、それ以外に示されているグラフには有意な相関が殆ど無いように見える。Talent Indexと、多様性・住宅価格・気候との間には正の相関がある。

最後に、新たに職を得ようとする際どの要因を重視するかについて技術者を対象に調査した結果を加え、地域ないし場の質(quality of place)がTalentを引きつける重要な要素で、職があることは必ずしも必要でないと結論づけている。

本章における検証は、従来曖昧な議論となっている部分に踏み込んだ面白さはあるものの、実証手法がやや単純に過ぎ、説得力に欠けるのが残念である。また、ゲイ比率が様々な指標と有意な相

関を有するというのも社会学的視点からは関心を抱かれるであろうが、そもそもゲイ比率自身が多様性や開放性を最もよく示す指標といえるかどうか、疑問は残されている。

(4) The Economic Geography of Talent (第4章)

前章までの議論を踏まえて、本章では構造モデルを構築してそれを統計的に検証している。本章のモデルは図4・1に示される構造を持ち、多様性をあらわす Tolerance 指標の高い地域は Talent を引きつけ、地域の競争力や技術力を高め、所得水準の向上に貢献する。また、Talent も、地域の競争力や技術力を高め、所得水準の向上に寄与する。最後に、技術力は地域の所得水準を高める。この仮説を多重回帰分析とパス分析により検証した結果は図4・5に示されている通り、多様性と所得水準の関係が負になっている以外は支持されたといえる。これより著者は、これまで地域の人材 (Talent) は経済成長に重要であるにもかかわらず所与とされてきたが、構造モデルの実証結果は、Talent を引きつける要素が重要であることを明らかにしており、企業や産業集積を形成することが地域発展の機転となるという従来の考え方に修正を迫る結論を導いている。この結論は地域経済政策を論じている多くの研究者にとってかなり衝撃的である。この考え方に立つと、さらに遡って、如何に地域を開放性を高く、人々の移入障壁を低めることが出来るか (Tolerance の高い地域にするか) が新たな政策課題となるからである。

統計データの作成や処理にやや問題はあるものの、従来の政策のあり方の基本に疑問を投げかけている点で迫力がある。

(5) Bohemia and Economic Geography (第5章)

本章と第6章が第Ⅱ部 Tolerance を構成する。第5章では近年の社会学における議論として、社会の周辺部にいる人々 (Bohemian) が主流をしめる経済活動に統合されつつあること、Bohemian に代表される多様性と創造性が都市の成長の源泉となること、をあげ、多様性と Talent 及び

ハイテク集積の関係を統計的に実証している。

ボヘミアン比率とは、都市地域における次のような職に就いている人の割合を指す。つまり、作家、デザイナー、音楽家、俳優・演出家、画家・彫刻家・工芸家、写真家、ダンサー、達である。この他の変数としては、Talent インデックス、ゲイ比率、外国生まれの居住者比率 (Melting-Pot Index)、等が実証に用いられている。

表5・3では、Talent インデックスが、ボヘミアン比率とゲイ比率によって説明されること、また表5・4には、ハイテク集積比率 (Tech-Pole Index) が、ボヘミアン比率とゲイ比率および Talent インデックスによって説明出来ることが示されている。

ボヘミアン比率の高い地域は、より開放的で Talent を持つ人々を引きつける魅力がある。そのような地域においてイノベーションが活発化し、ハイテク産業の集積へとつながるのである。

全体として興味深い結論が導かれているが、データや検証の手法をもっと吟味する必要があるようである。

(6) Technology and Tolerance (第6章)

第6章は Gary Gates との共著で、社会的・文化的多様性が Talent を引き寄せ、ハイテク産業の成長を刺激する、という著者の理論を検証することに当てられている。図6・1には Milken Institute の発表している Tech-Pole インデックスとゲイ比率の相関係数が年と共に上昇していることが示されている。ボヘミアン比率、Melting-Pot インデックスも同様にハイテク産業の集積と強い相関があることも指摘されている。本章の結論は、Tolerance と人的資本 (Human Capital) の参入に対する低い障壁が Talent を引きつけ、そしてハイテク産業の集積と都市の成長をもたらす、それが Tolerance をさらに高めて好循環過程につながる、というものである。データの解釈や検証手法はやや単純に過ぎ、これらの検証で上記の結論を導くのは論理的に問題があるように見える。また、その内容は既にこれまでの章で論じられたことの繰り返しの感が強い。

(7) The University, Talent, and Quality of Place (第7章)

第8章と共に第Ⅲ部 Place を構成する第7章では、大学が都市や経済全体の成長をもたらす原動力になるという議論は大学の役割を過大評価していると指摘し、産業界との連携を指向するのではなく、世界中から最もスマートな人々を引きつける力を発揮する場としての大学を目指すべきだと述べているのはユニークな発想である。産学連携について、企業側は自分の目的のために資金投下した方がよいと考え、大学側は自らの研究目的達成のために資金を使いたいと考えており、双方の目的が不一致になりがちである上、明確に成果が上げられたという確証がない。これを踏まえて改めて大学の機能を考えるとき、大学をイノベーションの源泉ないし新技術の地域移転機能という役割を果たすと考えのではなく、創造的経済のインフラとして Talent を産み出し育てる役割を大学が担うべきだとしている。

こうした議論は、今日大学が新たな地域経済発展の原動力として位置づけられつつある中で、改めて考え直すきっかけを与えてくれるものとして評価できる。統計的検証には欠けるが説得力のある議論である。

(8) Place-Making After 9/11 (第8章)

第8章の副題が、Rebuilding Lower Manhattan for the Creative Age となっていることから分かります。前章までの議論から少し離れ、2001年9月11日のテロ事件で崩壊した国際貿易センタービル跡地の再開発に関して著者が考えることをまとめたものである。ニューヨークを創造的経済の中心地と位置づけ、マンハッタン地区再開発に際しての基本的考え方を提唱している。

それらを列挙すると次のようなものである。新しいアイディアを産み出し取り入れたりする創造的環境を作ること、創造的ネットワークのハブの役割を担いつつ周辺部のインキュベーター機能と連動した複合的利用の可能な環境を整備すること、高度で多様な教育ネットワークの結節点として機能すること、生活・仕事・学習・遊びが統合された多様な共同体ないしは場として機能すること、を掲げている。大変同感できる内容である。

(9) Open Questions (第9章)

本章では、創造的経済の登場に伴う問題点として社会的・経済的な不平等の発生を指摘している。住宅の利用可能性、地域間の不均等発展、スプロールや環境面の悪化、社会的なストレスや不安の増大、政治的な極端化、がそれである。最後に、Technology, Talent, Tolerance の3Tを備え、社会の各層から創造的なエネルギーを動員して世界中のTalentを引きつけられる地域として、例えばカナダ、スウェーデン、フィンランド、オーストラリア、ニュージーランドなどをあげ、これらの地域が新たな時代を引っ張ることになるだろうとの予測を持って本書の最終章が閉じられている。

様々な不平等がどのように解決されるのかについての指針は見いだせないが、著者が主張する3Tがこれからの創造的経済への移行において如何に重要であるかが印象深く語られている。

4. おわりに

以上のように、本書は都市地域の経済成長を通常の地域政策分析とは異なって、人々の才能や能力(Talent)や地域の開放性や多様性(Diversity)との関連で捉えようとしたものである。評者は前著を読了したわけではないが、基本的には同じ論調の内容であり、本書はその続編としてそれを統計的に検証することに力点を置いたものということが出来る。このような視点はこれまでもなかったわけではないが、本書の独自性はそのようなややもすれば曖昧になりがちな議論を数値的なデータによって表現し、それを用いて統計的な検証を試みていることにある。

多重回帰分析やバス分析によって明らかにされたことは、地域の経済発展に関わる要素は、ハイテク産業の集積(Technology)のみでは説明できず、人の才能や能力(Talent)、地域の開放性や多様性(Tolerance)が重要であるということである。このことから得られる政策的インプリケーションは、従来型のハイテク産業誘致による地域発展は余り意味が無く、むしろ如何に才能を持つ人を集めるか、如何に開放的な地域社会を構築できるか、ということになる。還元すれば、経済政

策の中に社会政策や教育政策が入り込んで来るという重層性を意識する必要があるということである。

また、大学のあり方が今日次第に産業と連携してイノベーションの源泉として位置づけされつつある中で、大学が担うべき役割が才能ある人を育む場を提供することにあるとしている点でも、ユニークな発想がみられる。上記のように経済発展が社会的要因の影響を深く受けるとする著者の社会学的見地からすればごく自然なものであろう。

この様に刺激的な実証結果を含む本書であるが、幾つか欠点もある。まず指摘すべきは、非常に曖昧な概念（例えば寛容性、多様性、才能）を単純な指標によって表現することに関する吟味が不足していることである。確かに指標化しなければ表せないのも事実であるが、より広範な社会学的見地からも検討しておく必要があったのではないか。

第二に、結論を導くために用いられたモデルも非常に単純に過ぎるように見えるということである。第4章のようにかなり厳密な多重回帰モデルやパス分析が用いられているところもあるが、全体としては単純な相関分析の域を出ていない。従って様々な要因が複雑に、かつ動的に絡み合うような現象を分析するにはより高度のモデルを構築する必要があると思われる。

以上のような欠点はあるものの、問題意識は鮮明であり、それをさらに深めようとする多くの領域の研究者に対して様々な刺激を与えてくれる著作であることは間違いない。

以上